戦争と四国霊場・遍路　－高知の事例－

小幡　　尚（高知大学教育研究部教授）

The connection between war and the Shikoku pilgrimage route and its temples — an example of Kochi prefecture

Hisashi OBATA
Professor, Faculty of Educational Research, Kochi University

In this paper I examine the connection between war in modern-day Japan and the Shikoku pilgrimage route and its temples in Kochi prefecture.

When the government in the Meiji period was created there was a nation-wide movement to abolish Buddhism and destroy Buddhist temples and images.As a result, among the seventeen temples including Anrakuji, which were part of the pilgrimage route in Kochi prefecture, nine of them were destroyed and the others fell into ruin. However, after this movement settled down the temples were gradually restored, but during this time the Sino-Japanese war of 1894-1895 and the Russo-Japanese war of 1904-1905 occurred.

During the period of the Sino-Japanese war the following trends occurred among the pilgrimage temples.First of all, just like at other shrines and temples, prayer services were held to pray for the safety of the soldiers and that victory could be achieved.As well, under the direction of the prefecture, donations were solicited for the soldiers and their families.Memorial services and events were also held and on the grounds of some temples, stone monuments were erected to honor for those who had died in war.

Similar activities occurred during the Russo-Japanese war, but Chikurinji (No. 31) was especially unique in what they did.In 1890, Hoshin FUNAOKA, the head priest of Chikurinji, while striving to restore the temple asked for the cooperation of the people toward the war through such activities as community lectures.Furthermore, as a battlefield missionary priest he went to the war front with the local No. 44 infantry group and when he returned to Japan brought back such items as the hair of the deceased.Memorial services were held at Chikurinji to remember those who died in the Russo-Japanese war and Hoshin FUNAOKA worked to honor such people by returning the items of deceased to the families.

Further studies include the examination between the connection of war and the Shikoku pilgrimage route after this period because there is still very little known about this topic.For example, there is some evidence that during the Asia-Pacific war of 1941-1945 people made the Shikoku pilgrimage to pray for victory and that after the war they made the pilgrimage to mourn for those who had passed away

はじめに

本稿は、高知県を対象として、「戦争と四国霊場・遍路」の近代史について検討するものである。

近代日本における四国遍路についての研究は蓄積が薄い。とくに、大正期以降についてはその傾向が顕著である。そのため、基礎的な史実についても十分に明らかになっていないのが現状である。もちろん、戦争との関わりについても未開拓と言わざるを得ない状況にある。

このような中、「四国遍路の近代史」について注目すべき貴重な成果を挙げている研究者に森正人氏（文化地理学専攻）がいる。森氏は、「戦争と遍路の関係」に関しても重要な見解を提示している。

森氏は、著書『四国遍路の近現代―「モダン遍路」から「癒しの旅」まで―』（創元社、2005年）で、四国遍路が、明治時代から戦後に至るまでの「この百年ほどの間に、それぞれの時代に存在したさまざまな事象とつねに関係してきたことを具体的に示」した（p8）。同書では、「大戦下の四国遍路」についても検討がなされ、満州事変（1931年）以降「銃後の国民として戦争の勝利を祈り、また日本側の戦死者を弔うために四国遍路を行わなければならないという主張が現れるようになる」ことを指摘し、そのような目的を有す

る遍路が実際に存したことを紹介している（p136）。また、『四国遍路　八八ヶ所の巡礼の歴史と文化』（中公新書、2014年）の中でも、四国遍路が「一九三〇年代後半から次第に国家的政策の中に位置づけられていった」ことを指摘している（p168）。

本稿は、森氏の指摘を踏まえつつ、「近代における四国遍路」の一側面として「戦争との関わり」に着目して検討を進める。その際、次のようなことに意を用いたい。

今後、近代日本における四国遍路の研究を進展させていくためには、「近代日本における四国遍路・霊場」全体を視野に入れていくべきであると考える。すなわち、「遍路」という行為・人のみではなく、四国霊場、つまり札所とされた寺院の動態にも着目すべきである。

四国霊場の動向について検討するには、それぞれの寺院が地域において果たした役割について見る必要がある。札所寺院は、巡礼者にとってのみではなく、地域住民にとっても重要な存在であったことが想定される。さらに、地域に存する他の寺院との関係や、その中における位置付けについても考えるべきであろう。

また、近代における四国霊場について考える場合、その初頭に展開した廃仏毀釈運動とその影響を視野に入れる必要がある。よく知られているように、この動向の下、多くに寺院が廃され、衰退した。四国霊場も例外ではない。この時期の荒廃とその後の復興について十全に明らかにすべきである。

このような問題意識の下に検討を進める本稿の課題を改めて述べよう。本稿は、高知県を舞台として展開した「戦争と四国霊場・遍路」をめぐる近代史について検討するものである。本来であれば、「近代日本の戦争」全般を対象とすべきであるが、ここでは主に日清・日露戦争期を扱うことにする。このことにより、前述した森氏の指摘の「前史」を見ることができる。また、この時期について検討することによって、廃仏毀釈後の「復興」との関連についても何らかの示唆を得られるだろう。

「遍路」そのものについては、限定的な言及に止まらざるを得ないが、いくつかの事例を紹介する。どちらの検討においても、「事例の提示」が中心となるものの、これから研究を進めていく上での論点を提示したいと考えている。

検討に入る前に、高知県の札所寺院について確認しておきたい。高知県下には、現在16寺の四国霊場がある。すなわち（カッコ内は札所番号）、最御崎寺（24）、津照寺（25）、金剛頂寺（26）、神峯寺（27）、大日寺（28）、国分寺（29）、善楽寺（30）、竹林寺（31）、禅師峰寺（32）、雪蹊寺（33）、種間寺（34）、清瀧寺（35）、青龍寺（36）、岩本寺（37）、金剛福寺（38）、延光寺（39）である。尚、1993年まで、安楽寺が30番札所と見なされていた。そのため、本稿では安楽寺を含めた17寺を検討の対象とする。

もう一点、高知県全体の寺院についてごく簡単に見ておく。高知県に存する寺院全体の中で四国霊場が占める位置付けについての検討は今後の課題とするほかない。ここには、寺院数の概要のみを示しておく。

1901（明治34）年8月11日の『土陽新聞』（以下、『土』と表記）に「県下の寺院」という記事が掲載されている。その冒頭部分には次のように記されている。「最近の調査に係る県下の寺院」は臨済宗（妙心寺派）22、真宗（本願寺派）52、曹洞宗18、日蓮宗20、浄土宗（西山派）12、天台宗5、真言宗34、合計163寺である。以下、寺院の名称が列挙されている。ここにある四国霊場は臨済宗に1つ（雪蹊寺）、真言宗に15（雪蹊寺と神峯寺・善楽寺以外の寺院）である。

また、竹崎五郎『土佐寺院誌』（土佐寺院誌発行会、1932年）には、252の寺院が紹介されており、うち四国霊場は17である。

Ⅰ　「荒廃」と「復興」

よく知られているように、明治政府が明治初年に発布した神仏分離令をきっかけとして、全国的に廃仏毀釈の動向が現れた。この中で、多くの寺院が荒廃し、仏像や建造物などの多くの文化財が失われた。

高知県の四国霊場で、1868（明治元）年から1871（明治4）年にかけて、廃寺とされたのは9寺（津照寺・神峯寺・大日寺・善楽寺・雪蹊寺・種間寺・清瀧寺・岩本寺・延光寺）である。他の寺院も荒廃を免れなかった。例えば、金剛福寺は明治初年頃に「廃寺同様」となっていたという。

廃仏毀釈の「嵐」が過ぎた後、それぞれの寺院は復興への動向を見せる。廃寺とされた9寺は、1879（明治12）年から1889（明治22）年にかけて再興が許可されている[(1)]。復興の過程については、ほとんど解明されていない。ただ、当然ではあるが、それが一朝一夕に成し遂げられたわけではない。明治中期から復興に至るまで、長い道程を経る必要があったはずである。

荒廃の状況を瞥見しておこう。最御崎寺は、「維新後住僧頻りに交替、而も多くは俗僧無識、経を誦せずして、歌をうたい、釈迦仏を拝せず」という状況で、1906（明治39）年においても「零落其極に達し」たままであったという[2]。同年、津照寺も、最御崎寺ほどではないとはいえ、「屋根朽ち、柱破け、一見寺道の衰退を表」してたという[3]。竹林寺は「維新後寺道大に衰へて廃頽を極め」ており、1897（明治30）年に住職となった船岡芳信によって再興へ向けて動き出した[4]。

再興への動向としては、例えば次のようなものがある。竹林寺の船岡住職は、高知県庁や内務省と折衝し、1901年より「十ヶ年間金拾一万五千円の寄付を日本全国を勧進することを許可」された。さらに、「有力の檀徒を結んで竹林寺保存会を組織し内外喜捨の金を積んで遂に先づ仁王門の改築を完了」したという[5]。「仁王門再建並ニ宝蔵上棟式」は同年12月に行なわれている[6]。

青龍寺は、1901年11月に「大師堂を建築し…落成式を挙げ」た。その建築費は、「東西信徒の寄付」によるものだという[7]。また、1902（明治35）年8月には、清瀧寺の「大釣鐘」が鋳造されている[8]。

この頃には、寺院の仏像や建築物の歴史的価値が認められ始める。1904（明治37）年4月には、「内務省保存会技師関野貞氏」が「竹林寺外数ヶ寺よりの特別保護建造物編入出願に関する検査の為め…来県し…竹林寺宝物」等を検査した[9]。同年9月には、「竹林寺本堂（文殊堂）金光明四天王護国金堂（国分寺観音堂）」が古社寺保存法によって特別保護建造物として認定された[10]。

それぞれの寺院によって、復興の態様は異なると考えられるが、おおまかにいえば、日清・日露戦争期を含む明治20～30年代には、四国霊場は復興の途次にあったということができよう。

Ⅱ　日清戦争期の四国霊場

1　日清戦争と四国霊場

近代日本初の対外戦争である日清戦争は、1894（明治27）年7月に始まり、1895（明治28）年4月に終結する。ここでは、日清戦争期の動向を追い、四国霊場が日清戦争にどのように対応したのかについて見る。

この時期に県内で発行されていた新聞を見ると、神社仏閣などにおいて、戦勝と出征将兵の無事を祈るための祈祷・祈願が盛んに行なわれていたことが分かる。四国霊場も例外ではなかった。1894年8月5日『土』には、「清韓事件ニ付本邦軍人身上堅固強運之為メ」祈祷を執行するという潮江天満宮のものなどに並び、「廿七番札所　神峯山」による次の広告が掲載されていた。

朝鮮事件ニ付武運長久軍人安全ノ為本月旧四日ヨリ十日迄祈祷ヲナス有志者ハ御参拝アレ

同月11日付同紙には、「東寺」（最御崎寺のこと）における祈祷についての下の広告が載せられている。

日清開戦ニ付吾軍人安泰ノ為八月十二日ヨリ向一周間東寺ニ於テ御祈祷執行候条現役家属有志ノ御方ハ御参詣ヲ乞　　安芸郡室戸村以東真言宗寺□（1文字判読不能）中

また、同年9月2日の同紙には「県内義挙報叢（続き）」と題する一連の記事があり、その中で安楽寺の動向が次のように紹介されている。

土佐郡江ノ口村安楽寺は国威発揚兵士勇健祈祷を二日より四日迄仁王般若会を執行し四日午後七時より武揚協会長近藤氏と幣社の坂崎を招待して恤兵救族の演説会を開く

安楽寺では、祈祷に止まらず、外部より講師を招いた演説会が開催されていたのである。武揚協会とは1884（明治17）年に高知県内の「兵役に服する者を激励するために」結成された組織である[11]。武揚協会は、先駆的な軍事援護団体といえる。日清・日露戦争期には、高知県内の軍事援護事業において中心的な役割を果たした。近藤・坂崎とは、近藤正英と坂崎斌（筆名は紫瀾）のことである[12]。

「恤兵救族」とは後の語にいう軍事援護のことである。武揚協会が1906年に定めた「恤兵救族規程」では「出征軍人廃兵遺族並に現役兵の家族の慰問扶助を以て目的とす」る、と規定されている[13]。

この時期、武揚協会と土陽新聞など地元3紙により、恤兵救族義捐金の募集が行なわれていた。これに応じた人々の氏名と義捐金の金額を列挙した広告が、連日の紙面を飾っている。これに、県内の寺院も応じている。1894年8月17日付『土』に掲載された「恤兵救族義捐金」には、県内24の寺院が名を連ねており、そこには7つの札所寺院が含まれている（竹林寺・国分寺・延光寺・金剛福寺・岩本寺・津照寺・種間寺）。

2　四国霊場と日清戦争戦没者慰霊

次に、日清戦争の戦没者の弔いにおいて、四国霊場がどのような動きを見せたのかを見る[14]。この点については、僅かな事例を提示するに止まる。しかし、そこから興味深い論点が見いだせる。

下関条約調印よりも後の1895年10月5日の『土』に「本県真言宗寺院中」名の「追吊会広告」が掲載される[15]。本文は次のようなものである。

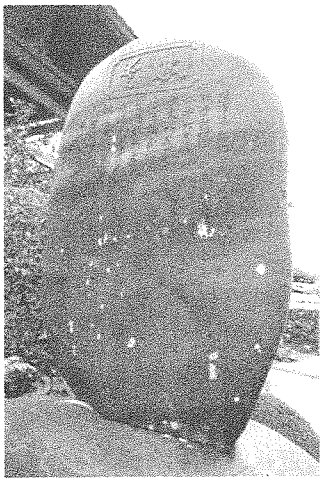
来る十月廿日陰暦九月三日五台山竹林寺本堂に於て本宗僧侶総出席征清軍死者追吊法会執行致候間当日有志各位御参拝あらんことを希ふ　追申当日午後一時より百味供養稚児行列但し雨天なれば順延

すなわち、竹林寺を会場として県内の真言宗寺院が日清戦争戦没者の追弔会を行なうというのである。

この法会の様相は、1895年10月22日の同紙記事「竹林寺征清死者追吊大法会の景況」に描かれている。はじめ、竹林寺より「参拝者一同へ忠魂の文字ある菓子と茶を饗せられ軈て文殊堂迄児十一人僧卅五名にて行列」があった。文殊堂で執行された法会には、多くの寺院の僧侶が参加している。その中には、竹林寺の他、札所寺院4寺（岩本寺・津照寺・安楽寺・禅師峰寺）の僧侶もいた。参拝したのは、「死者遺族高知尋常師範学校職員生徒五台山尋常小学校職員生徒本願寺別院惣代弘法寺住職三新聞社員等」であったという。四国霊場を含む真言宗の寺院は、日清戦争の戦没者慰霊行事に積極的に関与しているのである。

もう一つの事例を示そう。種間寺の境内には、同寺の所在地である吾川郡秋山村（現在は高知市の一部）出身の1人の日清戦争戦没者を顕彰する石碑が現存している〔図1〕。この碑は、自然石に文字を刻んだもので、最上部に「忠誓」とある。その下に「征清之役」に出征した陸軍歩兵二等軍曹橋本楠吾について、いくつかの戦闘に参加の後1895年6月26日に営口兵站病院で病没したこと[16]、その略歴などが記されている。末尾には「明治三十六年一月」とあり、1903年に建てられたものであることが分かる。また、境内奥には、橋本の名や階級が記された石の地蔵もある。

状況は不明ではあるが、種間寺による慰霊が何らかの形で行なわれたこと、そして地元住民が同寺を戦没者の慰霊の場として捉えていたことが分かる。



〔図1〕種間寺の碑

Ⅲ　日露戦争期の四国霊場

1　日露戦争と四国霊場

1904年2月、日露戦争が勃発する。1905（明治38）年9月に終結したこの戦争では、日清戦争を越える激戦が繰り返され、大きな犠牲を生んだ。ここでは、日露戦争期の四国霊場の動向を追う。

日露戦争が始まると、日清戦争の時と同様に、戦勝を願う祈祷・祈願が盛んに催されるようになる。1904年2月20日の『土』には、「五台山保存会本部」名の広告が掲載され、以下のように告知している。

本会ハ宣戦詔勅公布当日ヨリ竹林寺ニ於テ戦勝祈祷ヲ執行シ特ニ本会員ノ軍人ナルモノニ対シ多年尽瘁ノ労ニ酬ヒン為戦勝守ヲ配タントス依テ此際至急姓名年齢ヲ記シ本会迄申込アリタシ

同紙の同年3月9日には青龍寺による「海陸両軍全勝祈祷　…　但当寺講社中ノ軍人ニ身替守ヲ施与ス」との広告、同じく29日には雪蹊寺の「陸海軍大勝利金光明最勝王経懇祷満散　…　軍人擁護守符無料授与」の広告が掲載されている。「軍国余瀝」（『土』1904年3月19日）には、香美郡山田町（現在は香美市の一部）の「阿弥陀院寺住職吉川泉師」が、3日前に同寺へ竹林寺・国分寺などの住職を招き「戦勝及び軍人安全の祈祷を為し第四十四連隊の全部及び近傍在郷軍人に守札を配付」したと報じられている。後述するように、44連隊は高知の郷土部隊である。

日清戦争期とやや異なるのは、このような動向に否定的な見解が見られるようになったことである。『土』1904年4月24日の記事「僧侶神官の祈祷に就て」は、僧侶・神官などが「在郷軍人及び其家族等に対し陣中安全の祈祷など丶称して守護札を配付し過分の金銭を徴しつ丶あり中には迷惑せる向も少」なくないと指摘し、「此際其筋に於て十分の取り締まりありた」い、としている。このような主張がどの程度影響したのかは分からないが、戦勝祈祷等の儀式は少しづつ衰え、その頻度は減じていった。

祈祷の他にも、戦争の意義を説く講演会なども実施されていた。『土』1904年3月18日の記事「軍国余瀝」には、以下の記述がある。

清瀧寺住職伊藤英象氏は多数の信徒に向つて時局に対する演説をなしつ丶ありしが中には感動の余り即時出金して恤兵費送達方を依頼するものありとて金一円十四銭を武揚協会へ送り来れり

演説の内容は不明だが、「感動」の内容から、戦争への支持を調達しようとするものであったことが分かる。

また、同年4月27日の同紙の同名記事には、24日に雪蹊寺で「時局幻灯演説会」を開催したところ、「聴衆八百余名にして映画十数枚の説明あり大本山巡教師釈仏海禅師の演説あり頗る盛会」であったとある。祈祷以外の局面でも、札所寺院は、地域の戦争支持の調達に積極的な姿勢を示していたのである。

この時期にとくに目立った動向を示したのは、先にも触れた竹林寺の住職船岡芳信である。

船岡は、1868年新潟生まれ、1878（明治11）年に雛僧となり、1881（明治14）年に高野山に入る。その後、仏教大学を卒業し、1897年に竹林寺の住職となる。住職として、「全国を行脚して浄財を募り、衰えていた同寺を昔日の姿に再興した」と言われる。また、「日露戦争には第四十四連隊に従い渡海して弔祭慰問に努めた」。1921（大正10）年に死去し、墓は竹林寺の敷地内に定められた。1933（昭和8）年には船岡堂と呼ばれる祠堂が建てられ、現存している[17]。

船岡は、日露戦争期以前にも、「教育と宗教」などのテーマで多くの講演を行なっている[18]。日露戦争が始まると、この戦争を主題とした演説を繰り返し行なっている。1904年2月20日には、「赤岡町黒住協会場に於て…日露戦争対国民の覚悟との演題にて例の能弁を振」った。「聴衆は六百余名の盛会にして愛国婦人会の必要に説き及ぼし申込み者も多か」ったという[19]。同月27日には、高知市「中島町高野寺に於て催せし各宗連合祈祷会席上日露戦争と国民の覚悟なる掲題下に一場の演説を為せしが聴衆感奮せざるはなく直ちに愛国婦人会へ入会を申込みしもの二十八名あ」った[20]。同年3月15日には、香美郡山田町に招かれ、「国民後援演説会」に出演し1500名の聴衆の前で「国民の覚悟及び義務と題して二時間余の演説を為し」た[21]。

また、「軍国余瀝」（『土』1904年3月23日）には、22日の夜須村から4月8日の上韮生村・槇山村まで、県内の各町村においてほぼ毎日行なわれる船岡の演説会の予定が紹介されている。船岡は、高知県下全体にわたって「日露戦争に対する国民の覚悟」を説き歩き、一定の成果を上げていたのである。

船岡が演説を行なったのは、地域住民に対してだけではない。高知の郷土部隊である歩兵第44連隊の兵士たちへの演説も行なっていた。

44連隊は、日清戦争の終結後に、高知県に初めて置かれた「軍隊」である。同連隊は、1896（明治29）年12月、松山兵営において編制され、1897年7月に、土佐郡朝倉村（現高知市朝倉）の兵営に入っている[22]。

船岡は、1904年2月25日、44連隊の「招きに依り…練兵場に於て兵士一同に対し時局に関する演説を」行なった。ロシア人は日本人よりも体格がよく数も多いから、武器のみではなく「日本魂てふ精神的武装を為さゞるべからず」と述べ、「大に士気を鼓舞した」という[23]。

同年3月には、県下の真言宗各派による協議の結果、船岡を従軍させることとなり、手続きを始めた[24]。4月には44連隊が属する11師団から許可が降りた[25]。5月9日に高知を発ち[26]、同年12月13日に「脚気に罹り…善通寺予備病院に後送」されている[27]。

帰国後の船岡は、戦没者慰霊の局面でも、特異な役割を果たす。この点については後述する。

2　四国霊場と日露戦争戦没者慰霊

高知県においては、日露戦争を経ることによって戦没者慰霊のあり方がほぼ定まる。戦没者の公葬は、市町村毎に組織された軍事援護団体である兵事会・婦人会によって執行されるようになった。戦没者の多くは、忠魂墓地に葬られた。忠魂墓地とは、戦没者を葬るために市町村を単位として設けられた専用の墓地のことである。日露戦争中から戦後にかけて、県内の過半数の市町村に設置された。すなわち、日露戦争期には、戦没者慰霊の主体として、市町村が前面に立ち現れてくるのである[28]。

この時期の戦没者慰霊に、四国霊場はどのように関わったのであろうか。まず、公葬について見たい。

日露戦争戦没者の公葬が執行された会場は、その大半が地域の学校であった。寺院で行なわれた事例はごく僅かである。そのうち、四国霊場で行なわれた事例は、3例ある。長岡郡国府村（現在は南国市の一部）では、4回執行された村の公葬のうち、2回（1904年11月28日・12月7日）が同村に所在する国分寺で行なわれた[29]。同郡五台山村（現在は高知市の一部）の最初の公葬は竹林寺で執行された（1904年12月14日）[30]。しかし、これ以後の2回の公葬は小学校を会場としている[31]。

札所寺院の僧侶が公葬に参加している事例もある。1905年3月8日に、高知市による第5回の戦没者公葬が執行された。8名を対象とするこの日の葬儀では、10寺の僧侶が「合体にて引導作法を唱へ」たという[32]。10寺のうち2つが札所寺院であった（安楽寺・竹林寺）。

市町村の主導性が高まったせいか、四国霊場が戦没者慰霊にかかわる事例が、日清戦争の時よりもやや減じている。この中で、船岡芳信を住職に頂く竹林寺が、特異な動向を見せている。

1905年3月9日の『土』に「五台山竹林寺執事」名で、次のような広告が掲載される。

当山主船岡師近日帰山ノ上戦地ニ於テ預托致居候将校下士卒爪髪ヲ其筋ノ協議ヲ経テ当山ニ於テ御渡可申ニ付三月十五日迄ニ隊号官姓名戦病死者生存等名記シ端書ニテ御申込被下度交付ノ時日ハ追テ通知ス但昨年十月十日以後ノ出征者ハ一切ナシ

船岡は、同行した44連隊の戦没者の「爪髪」を預かり、それを携えて帰国したという。そして、それを「其筋」の許可を得て、「交付」する予定であると告知しているのである。同年5月4日の『高』には、「五台山竹林寺」名で同月9日に「軍人大追弔会夜戦勝大般若祈祷」が執行されるという告知が掲載されている。その末尾には「船岡師保管爪髪相渡ス」と記されている。

実際の追弔会は、次のように行なわれた(33)。式では「真言宗其他各宗の僧侶十数読経を」行なった。その後、知事と補充大隊長、山内侯爵等の焼香（三者とも代理出席）、五台山村の村長・兵事会長・婦人会長・青年会長等の焼香と弔辞が行なわれた。そして、山岡が「会衆への挨拶及ひ種々の報告をなし終て当日参列の遺族に対し山主が戦地より携帯し帰へりたる爪髪の交付をなせしがその数五百余に達し」たという。遺族を含む参列者は1000名を越えたという。

寺院が主導する戦没者慰霊行事は珍しい。ことに異例なのは、遺骨（に類するもの）が軍の「公式ルート」以外を通じて遺族にもたらされたことである。このようなことは極めて稀である。船岡が、44連隊等の軍当局から大きな信頼を得ていたことがうかがわれる。

この時期の四国霊場には、特異な動向が多くは見られない。しかし、日露戦争の戦没者慰霊と関わりが薄かったとはいえない。現在の各寺院には、その痕跡が多く遺されているのである。そのいくつかを紹介する。

金剛福寺の境内には、「明治三十九年二月」（1906年2月）に建てられたことが記された五輪塔がある〔図2〕。同塔には、「為日露両軍戦死病没者追福」「怨親平等皆成仏道」と刻まれている。戦争後に、日露戦争の両国の戦没者の慰霊のために建てられたものである。また、同寺の愛染堂内には、近隣町村の日露戦争戦没者名を刻んだ人の背丈ほどもある大きな位牌がある。

〔図2〕金剛福寺の五輪塔

雪蹊寺の境内にある馬頭観音堂の中には、1906年に同寺の僧によって筆書された日露戦争の「宣戦詔書」と近隣町村の「従軍諸氏之芳名」・「戦病死士之芳名」が掲げられている。また、同寺の西側には長浜村（現在は高知市の一部）の忠魂墓地が現存する。その敷地の東側に、日露戦争のもの21基を含む23基の戦没者の墓がある。墓のある敷地は、雪蹊寺の墓所と繋がっており、同寺が所有するものである(34)。墓地設置の状況は不詳であるが、雪蹊寺がそこで何らかの役割を果たしたことは明らかであろう。

大日寺の山門をくぐると、左手に墓所がある。そこに、ひときわ目を引く墓がある。同寺の所在する野市村（現在は香南市の一部）出身の日露戦争戦没者である野口宇三郎の墓である。建てられた時期ははっきりしないが、日露戦争期からあまり遠くない時期であると思われる。

これまで見たように、四国霊場が荒廃から復興する時期は日清・日露戦争期と重なる。札所寺院は、戦勝祈願、戦争の支持の調達、あるいは戦没者慰霊という局面において積極的に関わった。短絡的に結びつけるべきではないものの、寺院の復興という課題を追求している時期に国策たる戦争を支持し、地域社会が「戦争」を受容することに一定の役割を果たしたことは、今後踏まえておく必要のある事実であろう。

また、地域における戦没者慰霊という局面から見れば、日露戦争期までの状況の中で、慰霊のさまざまなあり方があり、四国霊場を含む寺院がその一端を担っていたということになる。日露戦争期の後、戦没者慰霊のあり方は画一化されていき、市町村、そして国が強く主導するようになる。この後、戦没者慰霊における、四国霊場と地域の寺院の役割は低下していくのではないか、という見通しを持っている。この点については、今度の課題である。

Ⅳ　戦争と四国遍路

最後に、遍路（霊場を巡拝する行為とそれを行なう人々）と戦争の関わりについて簡単に触れておきたい。

日清・日露戦争期における遍路について、現時点で判明していることはほとんどない。ときどき掲載され

る新聞報道では、「乞食に近い存在」「取締の対象」として描かれている。そのため「美談」として取り上げられることもあった。

例えば、『高』1904年9月6日の記事「感ずべき四国巡礼」では、栃木県からの遍路が、喜捨された金銭の中から50銭を「軍人家族の救助費に宛て呉れよと当市役所へ寄付し」たことが紹介され、「殆んど乞食同様視さるゝ身分を以て此の挙に出づ感心の至り」と評されている。

1938（昭和13）年4月から八十八ヶ所をめぐり、その体験を『遍路と巡礼　上』（自費出版、1942年）に著した三宅一右は、1942年5月5日付の「自序」にその契機を、「老人として出来ることによりて、尽忠報国の務めをなさんとて、遂に戦捷祈願と戦没せられし将士の御英霊の菩提を弔ふ発願を起し」たこと、としている[35]。

1945（昭和20）年のアジア・太平洋戦争の敗戦後には、戦没者の慰霊を目的とした遍路が行なわれている。山下昭『特攻・さくら弾機で逝った男たち　「破られた遺書」を追って』（彩流社、2014年）では、戦争によって特攻隊員であった息子を失った母が、49歳から95歳までに65回も遍路を繰り返したことが紹介されている（p128以下）。また1956（昭和31）年に発行された、岩波写真文庫176『四国遍路』の最後の一葉の写真には、（遺骨が入っていると思われる）白木の箱を持つ夫と軍服を着た青年の遺影を持つ妻という一組の老夫婦の姿が写っている。詳細は不明であるが、札所寺院で息子の慰霊を行なっているのであろう。

『高』1979（昭和54）年4月18日の記事「走って四国霊場巡り　戦友のめい福を祈る　〝同行95人〟大津市の森脇さん」では、「戦死した戦友のめい福を祈ろうと、四国八十八ヵ所の霊場をマラソンで回っている人」が紹介されている。

戦後、このような遍路は多く見られるようになったのであろう。その詳細、戦前との意義の異同などについて今後検討していきたい。

むすびにかえて

本稿では、高知県における戦争と四国霊場・遍路の関係について具体的に検討してきた。限られた事例の提示に止まったとはいえ、いくつかの論点が浮上したのではなかろうか。

日清・日露戦争期は、廃仏毀釈による廃寺・荒廃からの再興・復興の途上にあった。それぞれの寺院において復興を担った僧たちが、戦争への対応にも当たったのである。本稿では、竹林寺の船岡芳信という突出した事例を示したが、同寺のみならず他の寺院も戦争の局面において、戦勝祈願などの「戦意高揚」、戦没者慰霊などに積極的に関わることで、国家へ貢献する態度を示した。このことが、寺院の復興に際して一定の効能があったであろうと考えられる。今後、更に多くの事例を検討することによって、その態様についての知見を深化させたい。

また、本稿では検討できなかった時期、大正期以後、とくに満州事変期からアジア・太平洋戦争期の札所寺院の動向を見ていく必要があろう。本文で述べたように、この時期、戦没者慰霊の局面では、国の指導の下、市町村の主導性が高まると考えている。その中で、四国霊場が見せる動向について、具体的に検討する必要があろう。その後、改めて森氏の指摘についても考えたい。

寺院ではなく、巡礼という意味での遍路については、若干の事例を提示するに止まった。この問題についてのさらなる検討は、今後の大きな課題である。とくに、戦後における戦没者の供養においてどのような役割を担ったかのか、という問題について詳しく調査していく必要があると考えている。

本稿では述べられなかったが、札所寺院の現在の境内には、戦後に設置された戦没者慰霊に関わる施設が多くある。戦後における「戦争と四国霊場」も検討すべき課題である。

いずれにしろ、本稿は「戦争と四国霊場・遍路」を考えるための出発点に過ぎない。今後を期したい。

---

(1)　以上、四国霊場大観刊行会編『四国霊場大観』（弘法教会本部、1936年）p139-236、高知県編『高知県史要』（高知県、1924年〈名著出版、1973年、復刻版〉）p452-474による。平田卓也・砂本文彦「廃仏毀釈による寺院の転用について　ー高知藩内の四国霊場を事例としてー」（『日本建築学会計画系論文集』78巻692号、2013年）も参照のこと。

(2)　「風光覗眼鏡（下）　ゆかり　磯づたひ（一二）」（『土』1906年10月17日）。

(3)　「風光覗眼鏡（下）　ゆかり　磯づたひ（一三）」（『土』1906年10月19日）。

(4)　「船岡芳信」（寺石正路『続土佐偉人伝』〈富士越書店、1923年〉p144～147）による。また、「ふなおかほうしん

船岡芳信」(『高知県人名事典 新版』〈高知新聞社、1999年〉p712) も参照した。
(5) 同前。
(6) 『土』1901年12月18日掲載の五台山竹林寺保存会本部名の広告による。
(7) 『土』1901年11月12日。
(8) 「発起人」による広告 (『土』1902年8月12日) による。
(9) 「竹林寺宝物検査の結果」(『土』1904年4月9日)。
(10) 「保存の古社寺」(『土』1904年9月3日)。
(11) 外崎光広「武揚協会」(『高知県歴史辞典』〈高知市民図書館、1980年〉p654)。
(12) 安楽寺執事名の広告 (『土』1894年9月2日) による。
(13) 「恤兵救族規程」(『土』1906年5月2日)。
(14) 高知県における日清戦争戦没者慰霊については、さしあたり、拙稿「高知県における戦没者慰霊」(坂根嘉弘編『「地域のなかの軍隊」5 中国・四国 西の軍隊と軍港都市』〈吉川弘文館、2014年〉所収) を参照のこと。
(15) この広告はこの日以降、数回掲載される。『広辞苑』(第六版) によれば、「吊」は「もと、『弔』の俗字」である。
(16) 靖国神社社務所編『靖国神社忠魂史 第一巻』(同神社社務所、1933年) p937に橋本の名が見える。階級・死亡場所・日時は碑文と一致している (本籍地は県名のみ)。尚、管見の限り、出身村も含めて、「碑文」は橋本の経歴が分かる唯一の文献である。
(17) 前掲「ふなおかほうしん 船岡芳信」による。
(18) 例えば、「船岡芳信師の演説」(『土』1903年11月6日)。
(19) 「赤岡通信」(『土』1904年2月23日)。
(20) 「軍国余瀝」(『土』1904年3月1日)。
(21) 「軍国余瀝」(『土』1904年3月19日)。
(22) 武市佐市郎「歩兵第四十四連隊史」(『武市佐市郎集 第二巻 歴史編 中』〈高知市民図書館、1999年〉所収、初出は1932年)。
(23) 「船岡師の演説」(『土』1904年2月27日)。3月13日にも、同連隊で「時局に関する演説」をしている (「軍国余瀝」〈『土』190年3月15日〉)。
(24) 「軍国余瀝」(『土』1904年3月1日)。
(25) 「船岡芳信師の上京」(『土』1904年4月13日)。
(26) 「船岡芳信師の出発」(『土』1904年5月10日)。
(27) 『高知新聞』(以下『高』と表記) 12月16日。尚、従軍僧については、山崎拓馬「日清・日露戦争と従軍僧・従軍神官」(原田敬一ら編『地域のなかの軍隊8 日本の軍隊を知る 基礎知識編』〈吉川弘文館、2015年〉所収) 参照。
(28) 高知県における日露戦争戦没者慰霊については、拙稿「高知県における日露戦争戦没者慰霊」(高知大学人文学部「臨海地域における戦争と海洋政策の比較研究」研究班編著『臨海地域における戦争・交流・海洋政策』〈リーブル出版、2011年〉所収)、前掲拙稿「高知県における戦没者慰霊」を参照のこと。
(29) 「戦死者葬儀彙報」(『土』1904年12月7日)、「竹中一等卒の葬儀」(『高』1904年12月16日)。
(30) 「戦死者葬儀彙報」(『土』1904年12月14日)。
(32) 他に公葬の会場となった寺院に要法寺 (四国霊場ではない) がある。土佐郡潮江村 (現在は高知市の一部) の6回の公葬のうち3回の会場が同寺であった (「下元上等機関兵曹の葬儀」〈『土』1904年6月15日〉、「潮江村戦死者葬儀」〈『土』1904年6月24日〉など)。
(32) 「高知市第五回葬儀」(『土』1905年3月9日)。
(33) 「竹林寺の法会式」(『土』1905年5月9日)。
(34) 高知地方法務局において確認済み。
(35) この事例は森氏も紹介している。前掲『四国遍路の近現代』p148。